

「ベラルーシの林檎」 岸恵子著 朝日新聞社

(プロローグ)

その朝、サイレンは二度鳴った。警戒警報と空襲警報が切れ目なく鳴り、そのサイレンが鳴りやまないうちに、五月晴れの青空は押し寄せる B29 という銀色の怪鳥で覆いつくされてしまった。母は、水の張っておいた浴槽に掛布団を浸し、それで私をすっぽり包み「公園のテニスコートへ逃げなさい」と言った。『裏のお宅が留守で、赤ちゃんが一人で寝ているのよ』と言いながら裏口に駆け出した。外に出ると、兵隊さんに砂利道を引きずられ、防空壕に放り込まれた。私はどうせ死ぬなら、暗闇の中は嫌だと思った。焦げて嫌な臭いの掛布団を脱ぎ捨て外へ飛び出し、公園の松の木によじ登った。B29 による爆弾で、私の家は白い焰を吹き上げながら、ふわんふわんとお化けのように膨れ上がって踊っていた。私は松の木の上で、がたがた震えながら「今日で子供を止めた」と思った。私は 12 歳であった。

廃墟から 6 年、私は女優になっていた。映画「君の名は」が空前のヒット作となった。私は脇目も振らず、ひたすら「スター」という怪物稼業に専念して行った。それから 6 年後、私は日本を出奔した。24 歳になっていた。

(ユダヤとの出会い)

フランスはまぶしかった。良き時代の残香があり、日本は貧しく、私はとても若かった。私を見る彼等のまなざしは、別世界からやって来た珍種の生き物を「愛でる」というふうな色合いがあった。そんなある日、私には二人の連れが居た。一人は私と同年のパリジェンヌ、テレーズ、もう一人は夫の親友の奥様である知的な上品なニコール・B だった。私は小さい時から、靴のサイズで苦勞していた。足が小さ過ぎるのである。此の店なら注文次第でどんな靴も木型から作ると聞いて出かけて来たのである。厚化粧のオーナーは、いろいろ試した挙句、「うちはね、子供の靴はやってないよ」「子供専門店にでも行くか、それよりいっそ植民地にでも帰った方が早いんじゃないの」と言い捨てた。私は度を失って一瞬唾然とした。「ケイコ出ましょう。靴屋さんは沢山あるわ」とニコールが言った。私の腕を取っていたテレーズがくるりと店内の女主人に向き直った。「二度とこんな店に来ないわ。パリ中の友達にもおふれを出すわ」ドアを閉める瞬間、テレーズは「何よ。汚いユダヤ人！」と吐き捨てた。初夏の陽炎の中で、ニコールはふと立ち止まった。「私もイスラエル人なの。」テレーズは耳まで赤くして慌てふためいた。この時点で、私がテレーズの非礼と反ユダヤ感情をどの程度理解していたかは疑わしかった。

何故、ニコールは、ユダヤ人と言わずに、イスラエル人と言ったのであろうか？そして私が、東洋人に対するある種の「差別」が存在する事を知ったのも、「ユダヤ人」と呼ばれる人々に興味を持ち始めたのも、この日からであった。後で知った事だが、ニコールの祖父は、フランスの知識人が今も恥じ、深い傷跡を負った歴史的に有名なスパイ疑獄事件で冤罪になったユダヤ人の主人公、アルフレッド・ドレフェス大尉だったのだ。エミール・ゾラが「われ、弾劾す。」と告発文を書き、ドレフェス大尉の援助に立ちあがった事は良く知られている。ある夜、家族を含めた 10 人ほどの食事で、私は思い切って質問してみた。「一体ユダヤ人って、なあに？」談笑が一瞬止まり、皆が私を眺めた。夫は、呆れていた。「塩の全然入っていないスープは不味いでしょう？けれど、塩を入れ過ぎたスープはもっと不味いわね。ユダヤ人とはスープの中の塩のようなものですよ」と言ったのは夫の母であった。義母には才気と豪気と卓越した才能があった。彼女は今世紀初頭から中葉にかけて世界に名を馳せたヴァイオリストであり、義父はパリ国立高等音楽学校の教授で、有名なピアニストでもあった。

「武士道」？と言ってからかうように私を見つめたのは、フランスの高名なプロデューサーである。祖国を愛し、名誉を貴ぶのは別に日本人だけではない。「イスラエルは敵に屈せず、降伏せず」という精神が脈々と続いている。2000 年前の故事にちなんで「マサダ魂」という言葉がある。マサダ砦がローマの手に落ち、約 2000 年後に「イスラエル」が独立国として蘇生した時、独立宣言の中でベン・グリオンは「我々は人類に聖書を贈った」と言った。ギリシャからローマへと権力が移行する狭間で弱小ユダヤは、紀元 70 年に、エルサレムのソロモン神殿が炎上し、シオンが陥落した後も 1000 人近いユダヤ残党がマサダ砦に 3 年間も立て籠もってローマ軍と戦い、そして最後には、老若男女一人残らず自殺した。もしケイコがイスラエルに行く事があったら、是非マサダを見て来てほしい。そして、僕に話して欲しい。「何故、自分で観に行かないの？」と私。「僕は純粋のユダヤ人だけど、シオリストではない。大義の為に死ぬこともしない。もしそんな事が起こったら、僕はこの部屋の絵を抱えさっさと逃げる。卑怯と言われようが、悪と言われようが自分だけでも生延びる。何処かに隠れて、絵を売りながら食いつなぎ、時の流れをじっと待つ。ユダヤが滅びる事は絶対に無いのだから」彼の事務所には、ピカソ、ダリ、シャガール等の名画が無造作に掛けてある。彼は、なぜか私をひどく気に入ってくれ、我が家と彼の事務所の間にあるキャフェテラスでコーヒーを飲みながら、午後のひと時をよく過ごした。夕方になると夫やスタッフが合流して、フランス風エスプリが溢れるジョークや小噺が飛び交った。後に、このプロデューサーは自宅で猟銃自殺した。フランスを代表する大女優に失恋したからだという噂もあった。

今では、彼の顔を思い出すことも出来ないが「大義と言われて散るよりも、悪と言われて生延びたい」という彼の言葉が今も深く胸に残る。

父の10ヶ月にもわたる異国での闘病生活の間、医師として私の夫として、言葉に尽くせない看護をしてくれたイヴ・シャンピと私は、父の死から数年の後、離婚した。彼がほどなく再婚した相手は、純粋なユダヤ女性であった。夫と私を離婚に追い込むために、相手の女性が弄したあの手この手は決して美しいとは言えないものであったが、それは私側の理屈であった。妻子ある相手に万難を排して近付き、思いを交わせた行為こそ、もしかしたら「美」であり「善」であったかも知れない。日本人の得意とする「潔さ」などを引っ提げて、さっさと身を引いた私の方が苦勞無しの腰砕けなのだった。離婚の話をしている時、夫は「僕は君の日本に、到底勝てないと思った・・・」とぼつりと言った。私の一方的な我儘で長期不在をしていた時、彼が陥った深い孤独感を私はその時理解した。

豪胆磊落であった義母が90才で大往生をとげ、その2年後に義父が、更にその2年後に61才になっていた夫が突然この世を去った。シャンピが医科大学生であった時、パリはナチス・ドイツの占領下にあった。フランスは、ナチス寄りのヴィシー政権（ペタン派）とロンドンからラジオを使って抵抗運動を呼びかけるド・ゴール将軍の「自由フランス軍」と二つに分れていた。シャンピは、ピエネ越えをしてド・ゴール将軍の地下運動に参加していたのである。彼は、レジョレドヌール文化勲章の授章者であるほか自由フランス軍の功勞者でもある事から、葬儀は空母クレマンソーで行われ、彼が愛した北の海に葬られた。軍則として、家族であっても婦女子は乗艦が許されなかった。祖父母の後に父も失った娘は、氷雨の降る冬のパリに1人立ち何を思ったであろうか。母である私は、日本で市川崑監督の「細雪」の撮影中であった。シャンピの死で私は精神的に孤児になった。そんな時、NHKヨーロッパ総局から衛星放送の話があった。毎週土曜日に「ウイークエンド・パリ」という1時間の生放送をパリから日本へ送るといったものだった。ある時、夫と懇意にしていたイブ・モンタンに出演を依頼した。ノーギャラの上、「枯葉」「パルチザンの歌」の使用許可まで快諾してくれた。この時のインタビュー・カセットを再現してみたところ、5年前とは思えない、現在でも決して古くなっていない先見性のあるものだった。それを少し紹介すると、私「日本では、一般の人が政治に関心を持たず、特に人気俳優が政治的な意見を言う事が稀ですか？」モンタン「ヨーロッパに生まれ育ったらそうはいかない。政治の方がずかずかと貴方個人に関わってくる。誰が無関心でいられようか！」ちなみに彼はユダヤ人だという。「僕が大統領選に出馬するなんて、ナンセンスです。僕には学問も教養も無い。

人より多く苦しんだ経験があるだけです。僕は、トスカーナ生まれの貧しいイタリアからの移民です。11歳の時から工場で働いた。貧乏と差別と蔑視を潜り抜けてここまで来た。だから、僕の政治的立場や傾向は皆が知っています。俳優と言えども、俳優だからこそ、社会的な問題についての意見ははっきり表明すべきなのです。しかし、人に押し付ける事は絶対しません。」私「今、一番の関心事は何ですか？」モンタン「イスラエルとパレスチナ問題です。イスラエルは自滅できない。かと言って、パレスチナ人が祖国を奪われたことは由々しい問題です。解決策は必ずあるはずですよ。双方と世界の列強国が本当にそれを望んでいるとしたらです。世界は言葉では動かない。行動あるのみです。」弱者から強者へ、自力で変身した人の自説を貫く衿持がさわやかであった。

1988年、イスラエル建国40周年目の春であった。私は、イスラエル特集をやらせてもらえないかとNHK会長に直訴した。彼は「口も出さないが、金も出さないよ」と言いながらも、ヨーロッパ総局長をしてOKが出た。ヘブライ大学講師、笈川博一が同道してくれることになった。まず、海拔マイナス400mの死海に行った。旧約聖書によれば、太祖アブラハムの孫ヤコブが、一族を引き連れ、死海とヨルダン川の合流点を越えて、皆をヘブロン（パレスチナ）の地に先発させ、一人夜空を仰いだとき、顔が見えない強い者に襲われ、掴み合いの闘いになった。夜が明けて行く寸前、顔の見えない相手が言った。「ヤコブよ。これから汝の名をイスラエルと改めよ。何故なら、汝、神（エル）と掴み合い（イスラ）戦う者、故に」顔の見えない相手は神（エホバ）だったのである。「神に選ばれつつも、それを忘れ、逆らい『掴み合い』し生きて行くことになる民、地球上至る所で掴まれ続けて何千年を生き続けて行くことになる民の祖として、何とふさわしい名であろうか」犬養道子著 旧約聖書物語より。イスラエルとは、今ユダヤ人と言っている人々の祖先の名である。ダビデが北にイスラエル王国を、南にユダ王国を「イスラエル・ユダ連合王国」を設立したのは、紀元前1000年頃だった。世界の人々がこの人々を総じて「ユダヤ人」と呼ぶようになったのは、バビローア帝国がエルサレムを攻略し、ユダ王国滅亡させ、有名な「バビロン捕囚」の名で、ディアスポラ（離散）を余儀なくされたユダの一回目の滅亡（前587年）の時からである。こんな風にして、シャンゼリア通りで「ユダヤ人」と言わずに「イスラエル人なの」と言ったニコールの言葉の謎が、ある日、私に解けたのである。この死海の南に、その昔、富みに酔い、男色に耽って神の怒りをかい滅びたソドムの町があった。ふと思う、もし、アブラハムが生まれていなかったら、彼を太祖とするユダヤ教もキリスト教もイスラム教も生まれていなかった。聖書の中で、元々は異母兄弟であったイサクとイシュマエル、つまりユダヤとアラブの憎しみも、

中東紛争も無かったかもしれないのである。なれど、塩の無い人間の文化史は、どれほど味気ない貧しいものになっていたであろうか・・・！

ノーベル賞受賞者の60%はユダヤ人である。国なき民のディアスポラの中で彼等がみがき上げて来たものは「知」であり、「技」であり、「記録すること」であり、芸術や文学、科学の世界での覇者たる資質なのである。

ダビデの旗を掲げたイスラエル首相官邸は質素であり、その応接室は、食堂兼会議室であり、長いテーブルがあった。そこに質素なイスが並んでいた。シャミール首相は言った。「我々以外、どの民族がこの間、この地に独立した国家を作ったでしょうか？彼等はただ住み、通過して行っただけです。この土地は「約束された土地」なのです。外務大臣シモン・ペレス氏は「今世紀のどこに、この国発祥時の言語を使っている民族が居ますか？シリア、ギリシャも古代の言語を使っていません。イタリアも古代ローマの言葉などすっかり忘れています。我々だけが旧約聖書に書かれたヘブライ語を話しているのです。」と語っています。血のにじむような屈辱や差別、ジュノサイド等最凶の犯罪のターゲットに常に晒されながらも「神に選ばれし民」という、よすがの下に結集して来た人々の比類なき強さに圧倒される思いがした。しかし一方、私に石を投げたあのガザの少年は「僕らの国と家を奪ったんだよ、盗人だよ」と言って、じいっと私を睨んだパレスチナの少年は・・・」ユダヤが独立した国を持ったその時から、パレスチナ・アラブは国なき民の不幸を肩代わりしてしまったのである。2次に渡る世界大戦の戦後処理が杜撰であり、アラブ人にもユダヤ人にも同時に美味しい事を言ってしまった英国の二枚舌も不幸の産みの親ではなかったか？家には他国の人が住み、行き場を失ったパレスチナ・アラブ人が、当て所もなく金網の張られた難民キャンプにたむろして、暗い怨嗟の炎を燃やし続けている。

この後、ニューカドレニア映画祭に行く話、1990年の激動の東欧諸国を取材する話が続くが、要約は割愛する。ユダヤに関する記述を中心にしている為である。題名の「ベラルーシの林檎」は、この東欧の取材中のエピソードに由来している。最初の本書の題名は「国境が動く」だったそうである。

(不思議の国の蟻巣)

昭和が平成に変わってから久しい。日本のバブル景気が静まっても、ヨーロッパの人々の脳裡に刻まれた成金日本のざらついたイメージは消えて行かない。時の首相クレッソン女史が、日本人は頭の黒い「蟻」とはばかりなく豪語して、日本人＝蟻 説がフランス中に定着して行った。

私はそれを「不思議な国のアリス（蟻巣）」と混ぜ返した。日本人の血に流れる ちよつとの事では変質し得ない、その「美」と「醜」、「知」と「痴」、そして「寛容」と「偏狭」、絶望的に頑固な閉鎖性を感じ続けて来た。 日本を含む東洋の良さは、削除の心得、寡黙の美であるように私は思う。 余計な事は言わないし、しない、求めない。一を知って十を知る。西欧の日常の中では、十を聞いて、やっとなを納得するロジカルな明晰さが尊ばれるのである。我々は「感性」の生き物であり、西欧の人間は「理性」の民なのである。 しかし、日本人は「ここ一番の勝負」という肝心の時に、変な遠慮や言ったってどうせ分って貰えないという諦めから、全てを省略したのでは、誤解は益々広がり“不思議な人達”と言う事になってしまう。 パリでノイローゼになる日本人の話を娘にしたら、娘は笑いながら「だって、日本人はやわだもの。苦勞の仕方が違うもの、何と云っても日本は、国中がディズニーランドだから」と言う。

1993年9月13日、ヤセル・アラファト PLO 議長が先に手を差し出し、一瞬戸惑ったラビン・イスラエル首相が握手に応じた時、ホワイトハウスに集まった観衆がどよめいて拍手した。私はパリで一人 TV の前で起立して、あふれ出る涙と共に手が痛くなるまで拍手を送っていた。 シオニズム運動から 100 年、イスラエル独立から 45 年、両者とも過激派という爆弾を抱えての勇氣ある和平の第一歩、正に歴史的瞬間であった。窓の外ではユダヤ人とアラブ人が抱き合っ

コメントと感想

我々の年代にとって、岸恵子は大スターであった。菊田一夫作「君の名は」で大ヒットしたが、私にとっては、池部良と共演した「雪国」の駒子が印象に残っている。何冊か彼女の出版した本を見たが、芸能人の書いた、多分ゴーストライターが居る本だろうと手に取った事が無かった。先般紹介した「シリアとレバノン」を読んでから、イスラエルに興味を持ち始めた。そして本書を古本屋で見つけ手に取った次第である。

読後、まず感じたのは、岸恵子は素晴らしい国際的インテリであると言う事である。パリで夫の友人であるフランスの文化人や他民族の知識人と交わった事、東洋人として差別の視線を浴び、自分の頭で世界情勢を考えるようになったと思われる。しかも彼女の書く日本語も美しい。彼女の他の本も読んでみたいと思う。

我々日本人は、ギリシャやローマについて、本や観光でかなりの知識があるが、イスラエルについては殆ど知識が無い。又、ヨーロッパの人々がユダヤ人をどう思っているのかというのも分っていない。

ユダヤを知るには、ヨーロッパの専門家の本を読むより、日本人の一般の人が書いたものを読んでみたいと思ったのである。日本には、ユダヤ人のような特異な人々は存在しない。在日朝鮮人や在日中国人は居るが、その成り立ちが異なる。だから、日本のスープは薄味なのかもしれない。

シャンゼリゼ通りの靴屋でのエピソードで、ユダヤ人とイスラエル人の違いが彼女には分からなかった。昔、国を持っていたイスラエル人と、ローマに滅ぼされ、国を亡くし、ヨーロッパ中に離散したユダヤ人。又、近代になってイスラエルを建国したシオニスト達と未だにヨーロッパ各地に住んでいるユダヤ人。この個々の意識は日本人には到底理解が出来ない。

彼女は、批評家としての視点を持っている。ジャーナリスティックな才能を有している。夫であるシャンピが、彼女に女優としてより、むしろこの才能を示唆していたことが本書の随所に見受けられる。批評家としての才能と新しい成果物を紡ぎ出す能力とは別物である。例えば、小林秀雄の小説を読んでみたいとは思わないであろう。

彼女が、パリで、アラファト PLO 議長とラビン・イスラエル首相が握手する場面を TV で見て泣きながら拍手する記述は感動した。そう言えば、小生もオバマ大統領の就任スピーチを TV で見て、まさか黒人大統領が誕生するとは！又、そのスピーチの素晴らしさに感激し、TV に向かって拍手した事を思い出した。